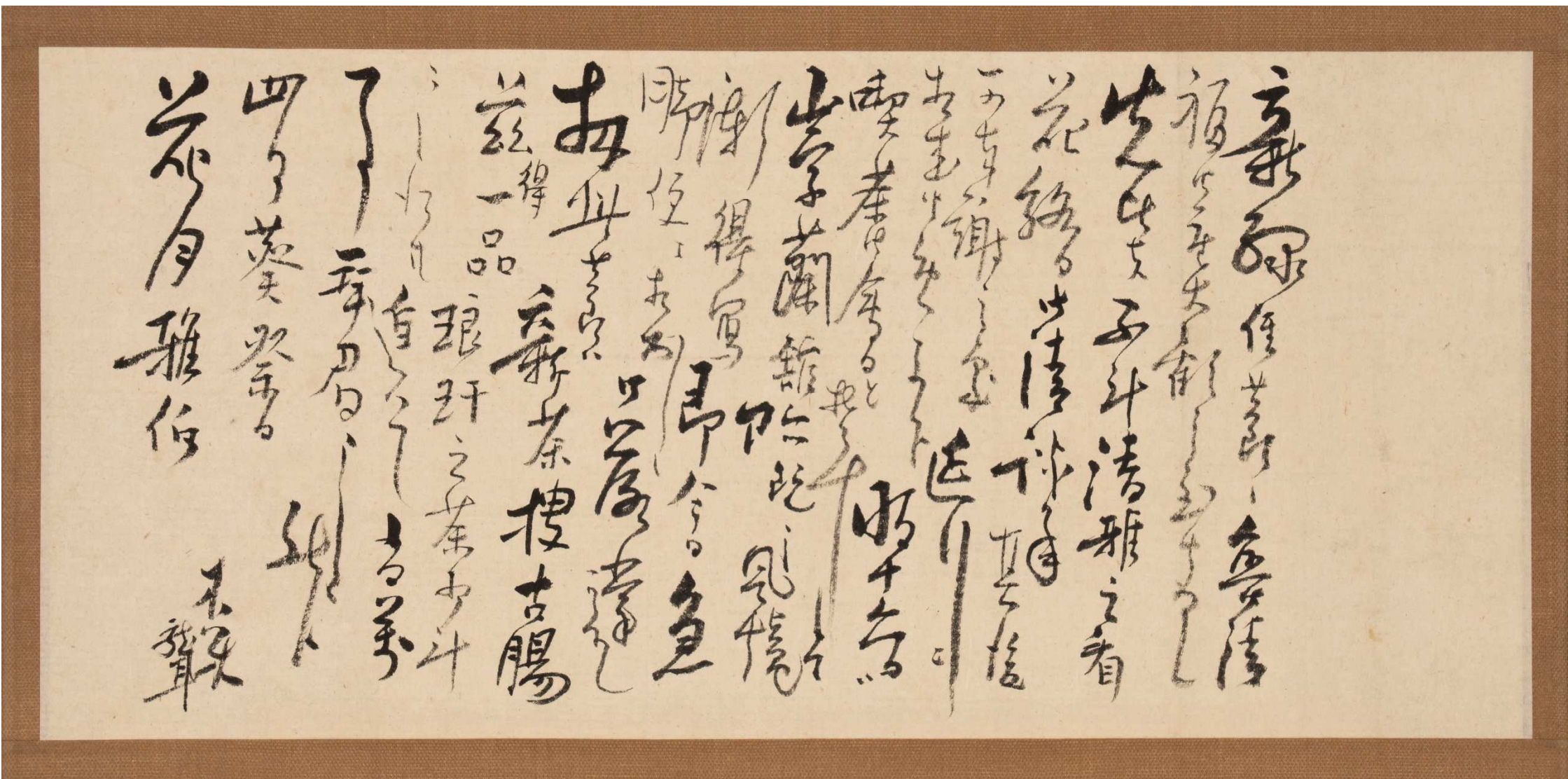


花月菴宛書状（四月葵祭日付） 木米

紙本墨書 縦一七・二横三七・三

江戸時代 十九世紀 花月菴蔵



花月菴鶴翁（一七八二〜一八四八）は、大坂で代々続く酒造屋・田中屋に生まれ、家業に励んだ後、売茶翁の遺風を慕って煎茶花月菴流を創始した。木米が鶴翁と親交を深めたのは文政七年（一八二四）頃といわれ、複数伝存する花月菴宛書状からは、文政から天保年間にかけての木米晩年の動向をうかがい知ることができる。

本書状は、「崇蘭館」所蔵の涼炉の写しがようやく出来たので、明日十六日の御茶会に間に合うよう、急脚便で送ったことを伝えている。「崇蘭館」とはおそらく、国内有数の古典籍の蔵書を誇り、自邸を崇蘭館と称した京都の医家・福井家を示すものと思われる。当時の福井家には榕亭（一七五三〜一八四四）とその長男・棟園（一七八三〜一八四九）がおり、特に榕亭は書画骨董の蒐集家としても著名であった。なお、木米は田能村竹田に初めて煎茶を振る舞った時、榕亭特製の茶葉を用いている（作品番号3・7「木米喫茶図」解説参照）。一方、煎茶花月菴流では売茶翁の月命日にあわせて毎月十六日に御茶会を催しており、この大切な場で使用する道具とすべく、木米は福井家所蔵の涼炉の写しを制作したものと推測される。

（サントリー美術館 久保）

- 新緑佳節候愈御清
- 福御座大観之至奉存候
- 先比者不計清雅之看
- 花終日御清談承其後
- 可奉謝之処延引二
- 相成御免可被下候明十六日ハ
- 喫茶御会日とそんし候て
- 崇蘭館珍玩之風炉
- 漸得写即今日急
- 脚便三相出し候御落掌可被下候
- 扱此節ハ新茶搜古腸
- 茲得一品琅玕之茶少計
- 三候得共進上候尚万
- 事拝眉申候 頓首
- 四月葵祭日
- 花月雅伯 木米聾